

# 建部綾足の文学活動と賀茂真淵の周囲

井 上 豊

## 目 次

はしがき

一、綾足と真淵の交渉

二、片歌論の提唱

三、魚彦・千蔭と綾足

四、宇万伎について

五、綾足・宇万伎・秋成

六、秋成の古典学と「雨月物語」

七、「時雨日記」と「詞草小苑」

## はしがき

建部綾足（一七一九——一七七四）は、江戸時代中期に現れて、俳人及び画家として一家をなし、のち片歌を唱導して国学に志を向けるとともに、「西山物語」「本朝水滸伝」（吉野物語）等説本にも健筆を振り、近世小説の発

達に時期を画した。また多くの紀行類をも残している。多方面にわたりすぎて、どの方面でも大成したとは言いがたいが、一異彩たるを失わない。

ほど同時代の賀茂真淵（一六九七——一七六九）が国学に恵念し、万葉集の研究と万葉調の作歌に生涯を捧げたのと対照して興味があるが、綾足が真淵の門下として一時名を列ねているのは一奇といわねばならない。この事実是一般によく知られていながら、あまり問題にされないのは、両者の交渉が一時的なかりそめのもののように見られたのと、真淵の綾足にたいする影響が稀薄なように考えられるからであろう。けれども仔細にしらべてみると、両者の交渉は相当に複雑で、影響関係も表面から考えられるよりも深いものがあるようである。真淵にとって忠実な門下とはいゝがたいにしても、県居派の影響圏内の人物として、また近世中期における文芸復興運動の一翼をなすものとして逸しがたい。また県居派の文学活動の特殊な展開を見る上からも興味があるので、そうした点から、改めて綾足と真淵及び県居派の一統との交渉を考え、さらに真淵には孫弟子に当る上田秋成と綾足・宇万伎との交渉に及ぶことにしたい。

### 一、綾足と真淵との交渉

綾足が真淵に入門したのは、宝暦十三年ということになっている。「県居門人録」に、「宝暦十三年九月 建涼岱」と見え、清水浜臣の「泊渚筆話」に門下が真淵にさした誓詞が当時伝わったのを紹介した中に、綾足の名をもあげ、

源綾足 建涼岱、著書数部、今上本して世に伝ふ。

としている。涼袋（涼岱・涼岱）は綾足の排号で、宝暦十三年には、真淵六十七歳、綾足四十五歳であった。真淵

はすでに宝暦十年田安家を退いて、隠居の身であり、十三年の春から夏にかけて、大和めぐりの旅を終えている。綾足の入門を宝暦十三年の九月とすると、真洩の大和旅行の直後ということになる。綾足も江戸浅草の吸露庵に落ちつく前には大和の桜井の里に寓居をつづけ、門下にすゝめられて定住をも企てたくらいであるから、一しお真洩になつかしさを感じたことであろう。綾足が秩父小鹿野おがのの俳人百梅のてびきで、大和から江戸にくんだり、老母や妹と数奇な対面をし、つづいて浅草金竜山下に吸露庵を営んだのは、延享四年二十九歳の時のことであつた。

「県居書簡続編」九八（八月二十一日、梅谷市左衛門宛）に、

右之演舌之人は良太といふ唐画かきにて、はいかいも上手にて、其両様の門弟多有之候。然延近年万葉を好候て加藤要人に下直しなど頼候て、此度われら門弟に成候。此良太大道寺へ内縁有之、右に心やすきよしを四五日以前聞出候て如此に候。

とあるが、良太は綾足をさしたものなるべく、入門後間もなく相当親しい関係をもったことが知られる。この書簡は全集では年代不明とされているが、前後の文面から、浜町移転問題を中心としているようで、明和元年真洩が浜町に居を移したころのものらしい。移転は六月初旬ころからはじまり、九月に終っているので、八月二十一日の日付からすれば、明和元年のものとは推定される。すなわち綾足が入門した宝暦十三年九月から、ほぼ一箇年後のことである。書簡に大道寺とあるのは、工事関係の幕府の要人らしく、綾足と内縁があつたというから、綾足の母の父大道寺友山あたりの縁類かもしれない。加藤要人とあるのは、千蔭註二で、千蔭は魚彦とともに画の方面で綾足の門下となっており、宝暦十年稿「寒葉斎画譜」は千蔭・魚彦（楳浦景良）ら綾足の門下が同輯したものである。浜町移転については、魚彦も尽力しているが、魚彦はのちにのべるように俳諧においても、綾足の門下となっていて、親交があつたので、兩人協力して移転を助けたのであろう。

しかるに「県居書簡続編」八七（明和六年蓬萊雅楽宛）には、

綾足といふもの仰の如く今時のはいかい発句てふものをせしものにて侍り。此者從來虚談のみにて交りがたし。されども己が門人に宇万伎といふ人の近所に借宅して、こゝかしこ聞そこなひしを、片歌とやらんをいひなんとて京へのぼりつとか承候。必御交は有まじき事也。谷川氏を問しとや。さこそ此ぬしは一言にてさとられ候はんと存候。

とあつて、真洩はまともな門人として扱っていない。（蓬萊雅楽は伊勢神宮の権禰宜をつとめ、谷川氏は伊勢国津の国学者谷川士清をさす。雅楽は士清の女婿であつた。）綾足が真洩に入門したことはたしかであろうが、まともな従学は長続きせず、のち真洩からは破門同前の扱いを受けるに至つたと見られる。

註三

「宇万伎といふ人の近所に借宅して、こゝかしこ聞そこなひしを、云々」とあるが、宇万伎は浅草三筋町住とあり、綾足も長く浅草に住んだので、近隣関係で宇万伎とも早くから相識だつたと見える。入門については千蔭が斡旋したのであろうが、真洩の古字については宇万伎を通して長く親しんでいたらしい。「綾太理家之集」等に見える古代風の長歌を見ても、古典にたいする造詣の深さが思われるが、右のような事情を考えれば、うなずかれよう。真洩との直接の関係は深くなかつたにしても、間接にはかなり影響を受けたと見てよいと思う。

真洩との関係は疎くなつたが、宇万伎との交渉は後までつき、「綾太理家之集」に、「防人宇麻伎ぬし任果て東にかへり給ふを」として、長歌（反歌二首）をよみ送っている。これは宇万伎が大番の与力として勤番に上京し、任を果して帰るのを送つた歌で、綾足が明和四年上京後のものである。宇万伎は明和三年から四年にかけ大阪にも勤番で来ているが、この歌を贈つたのは、内容から考えるに明和五年に来て、同七年に帰つた時のものらしい。すなわち真洩が世を去つた翌年のことである。真洩の没後も宇万伎との交情は続いていたと見られるのである。

## 註一

綾足は後年の称呼で、はじめ俳号を鳶鼠といひ、ついで都因と称し、金龜山下に吸露庵を営んでから涼袋（涼俗・涼俗）と改めた。綾足が在郷時代の津輕藩老侯信寿は芭蕉門下の破笠と親しく、（破笠も弘前を訪れ、子は津輕藩に仕へている）、みずから俳句を嗜み、次代の信著（綾足と同年）も句作を残しているし、綾足の兄喜多村久通にも歌俳双方の作があるから、綾足にも在郷時代まねごとの作くらいはあったのかも知れない。（久通は燕子と号し、寛保二年になった支考系俳人盧元坊の「花供養」にも句が見え、のち藩主の改葬問題で身を引いた時にも句を残している。もつともこれらは綾足が郷里を出たのちのことである。）まともに句作にうちこみだしたのは、郷里を出て難波で野坡に入門したころらしいが入門した前後の事情は「紀行声のやどり」に詳しい。野坡入門に先だち、郷里を出て、秋田から北陸路をへて上京したときの紀行と見られる「笈の若葉」に多くの句をのせているが、紀行はのちになつて書いたものであるから、句も後から入れたのかと思う。「をり／＼草」の記事とくらべて見ると、「笈の若葉」に脚色が多いことがわかるし、「をり／＼草」のこの時の記事には句も入っていない。けれども後から加えたにしては句の数が多すぎるし、野坡にあったときも綾足はいきなり発句をよみ、野坡・風之と三吟をも試みたりしている。「俳仙窟」によると、野坡は綾足を「風雅の逸物也」と称したという。これらの点から見ると、野坡にあう前に俳諧には一通りの心得があり、しきりに風雅を口にしているのも俳諧を中心とした意味かも知れない。「紀行瘡法師」の元文五年中と推定されるあたりの記事に、「これより先キのとし越の沾耳坊行脚しきたりて、支考らが論に人をいれしが、はじめて風雅と云ものをきゝて、いま目のさあたる顔し、むつかしきことどもさやぶり出たのしむ、いとおかしかりし、」とあるが、「先キの年」はいつごろをさすのであろうか。前後の文章から考えると、野坡門に入つて元文四年まだ在京していたころのことかと思われる。あるいは上京に先だち出羽に身をひそめていたころのことか。野坡は元文五年、綾足が京都を離れ秋田にくだった間に世を去つた。綾足はのちに江戸を出、秩父の寺に入り、延享元年の冬上京して、野坡門の風之・梅従らに迎えられたが、百川のすゝめで金沢の希因や伊勢の梅路に学び、伊勢派に転じた。（元来伊勢派と関係が深く、支考に傾倒した時期もあるので、実は転向というより、自己回帰であつた。）野坡門の期待にそむいて、伊勢派に転じたことから、鞘あて問題を起したりした綾足は、門下のすゝめるまゝに古都に近い犬和桜井の里に定住を覚悟し、はゞ住居も成つたところへ、百梅からの手紙が来たのであつた。百梅はかつて秩父在住のころ親しんだ老俳友である。浅草に綾足が吸露庵を営んで住んだについては、津輕藩主（信寿以来）浅草観音との深い関係をも考える必要がある。綾足の兄久通が藩主の代参をした記事もある。

吸露庵を営んだのは百梅の配慮によるのであり、綾足自身としては進んで津輕藩関係に接近する意図はなかったとしても

百梅の並々な努力のかけには特殊な因縁が考えられるのである。

## 註二

綾足は「加藤枝直日記」によると、明和三年ごろから魚彦あるいは宮沢通魏とともに千蔭の父枝直をも訪れている。通魏は豊前中津侯奥平家の医官で、枝直の門人らしく、江戸では茅場町に住んだとある。浅草に住み、金亀子と号したともいう。枝直や貞淵と同町内にいたのであり、中津侯は通魏を使として貞淵に入門を申しこんだという、(佐佐木信綱著「賀茂貞淵と本居宣長」)。奥平氏の江戸藩邸は汐留にあり、奥居のあった浜町の近くであった。

綾足あたりが背後で斡旋したものか。のち綾足は貞淵と疎々しくなるが、枝直と綾足は貞淵の波後も交渉をつづけ、綾足の倭建尊の歌碑建設についても尽力し、「仰雲集」にも歌をよせている。「綾太理家之集」に、「橘の枝直い勢物語の詞をくはへておこしたるにこたへて、」として詠んだ歌も見える。

枝直は北畠氏の後裔で、伊勢を郷国としているが、綾足も南朝方に異常な熱意を示していて、両者共鳴する点が多かったのであろう。

## 註三

「賀茂貞淵と本居宣長」にひく貞淵の書簡に、「河津宇万伎、大番与力株を求め候うて、旧冬おしつめ浅草新堀へ引こし候」、とあるが、のちに見るように、宇万伎が大番与力株を買ったのは明治元年ごろらしく、同年冬あたりに移転したのであろう。

浅草三筋町住というのはその後のことか。

## 二、片歌論の提唱

綾足の真淵に入門した時期は、俳諧から片歌に転じたのと前後している。普通には真淵の国学にひかれて俳諧から遠ざかり、片歌を唱えたように伝えられているが、実際はもっと複雑な経過をたどったらしい。この間の事情につき、「続近世畸人伝」の建凌偈の条には、

後加賀に遊び、俳諧に名ある希因といへる人に学びしが、希因は心ある人にて、僧のあまりに此の伎に耽ることを戒めければ、腹立ちて交も疎くなりぬ。伊勢に行きて、乙由が流を学び、終に還俗して江戸に住み、俳諧をも

て鳴る。風義は伊勢にて、しかも新奇自在のもの也。されば此の伎をもて富をなすもの、浪華の淡々と、此の人に並ぶものなしと聞ゆ。然るに其の間に賀茂真淵興りて、もはら万葉の古風を弘むるにより、其の妻を門人とおのれはうち／＼に其の説をとりて学ぶ。終に俳諧を止め、片歌といふことを唱ふ。それは古事記に出でたる日本武尊の御作歌、

にひはりつくばをすぎていくよかねつる

とあそばしたるに基す。これをせどう歌の片歌といひ、五七五の常のさまなるをも片歌といへり。

前掲の真淵の書簡にも、宇万伎を通して「こゝかしこ聞そこなひしを」とあり、右の記事には、妻を門人とし、「己はうち／＼に其の説をとりて学ぶ」と見えるように、真淵と綾足の直接の交渉は軽くて終ったかと思われるが、先に述べたように、正式に入門していることは確かであり、かなり立ち入った交渉をもった時期もあったのである。

綾足の片歌説の根本は、俳諧の起源は元来片歌にあるとし、発句という名称は片歌に改め、卑俗に墮した俳諧を古雅に還すのを主眼とした。そして「続近世畸人伝」の伝えるところでは、真淵に入門してから片歌に志を向け、俳諧を捨てたようになっていたが、片歌を唱えだしたのは、真淵に入門するよりも前のことである。すなわち綾足が真淵に入門したのは、宝暦十三年の九月であるが、綾足には同年の三月の跋をもつ「片歌二夜問答」の著があり、同年二

註一

月末から六月初旬にかけての紀行「片歌道のはじめ」にも、「片歌二夜問答」の上木が予告されている。「片歌草のはり道」のことも同書に見え、宝暦十三年前半に綾足の片歌熱は高潮に達したもののごとくである。「片歌道のはじめ」では、綾足が俳諧から片歌に転じた所以を詳しく説き、万葉風の短歌や片歌の作例も見える。片歌に憑かれてほとんど夢遊病者のようになっていたらしい。当時は片歌といっても、俳諧との区別が明らかでなく、相当に俳趣を帯

びたのがまじって、過渡期にあったことが知られる。

註二

この年九月には「古今俳諧明題集」も刊行されているが、涼袋撰句集でありまた片歌集である。したがって宝暦十三年の九月に真淵に入門したよりも前に、綾足は片歌の意義を自覚し、片歌論を鼓吹するとともに、制作をも試みたと見られる。真淵の言葉にも、「近年万葉を好候て」とあるように、片歌研究のために古学の必要を感じて入門したとも考えられる。後年古代風の長歌や短歌なども多く残しているのを見ると、片歌研究のみが入門の目的でもなかったのであろうが、とにかく真淵に入門して片歌に志したとする通説は改める必要がある。まして国学の流行にひかれて俳諧から遠ざかったというような俗説は、綾足の真意を離れたものである。もつとも頼原博士も注意しているように（「俳諧史論考」）、県居門下の千蔭や魚彦が絵画の方で早くから綾足の門下となっていたので、それらを通して県居派の国学を知り、片歌の唱導に示唆や刺激を与えられた点も考えられなくはない。宇万伎の説をこゝかしこ聞きそなつたと真淵の言葉にあるのも、綾足が真淵に入門する以前からのことであらう。（宇万伎との関係については、後で改めて考察する）。

綾足が俳諧から遠ざかったについては、「続近世畸人伝」に、

この風（片歌）を起して後いへらく、俳諧は無用のあだ言なりと知りたるより止めぬ。片歌の用ひられぬは、もとよりの覚悟なれば、画といふ業をたて口を糊す。人は用ひずとも、片歌の興起は我也。これが為に俳諧といふ宝の山を出でて、片歌といふ淵に身を投げたり。

とある。ある人が綾足のような人物を「畸人伝」の中に入れるのは控えるように注意したが、そうした志に感じ入れることにしたとも伝えている。「近世畸人伝」の続編は、画人三熊花顛（思孝）の稿を伴蒿蹊が補ったものである。花顛は綾足の師事した熊斐の門下で、綾足と同門関係にあり、綾足については特別に消息がくわしかったのであろう。



高蹊も綾足と多少交渉があった。記事には誤りもあるが、正しい消息も伝えており、右のような記事は信じてよいであろう。寛延元年三十歳の時出した「南北新話」あたりでは、俳諧に深さや高雅を求める愚をわらい、輕妙を喜ぶ傾向を示しているが、のち俗談平話を厭う傾向が強くなり、俳諧から片歌へ転じた一つの動機になっていることは争えない。<sup>註三</sup>寛延三年から宝暦の初年にかけてのころから漢画に心を向け、宝暦十年「寒葉齋画譜」ができてゐるが、画法において卑俗を斥け、氣象の高雅を尊んだのも、同様な傾向の現れであろう。また浜館貞吉著「寒葉齋建部綾足」に熊谷住野口雪江の手記を紹介した中に、

凡そ道は高き低きおのがさまの道あれど、ゆがみもぢりたる道はあらず。もとより教もさる事にて、唯なほきとこそをしゆるものを、此俳諧でふ物ばかりは直にてはをかしからず、こゝをばすこしゆがめよかし、こをばはしきれ、こゝをば少しことそげなど謂たはむる物なり。さるはおのがすがたよりはじめて、家居、衣、うつは様の物までもなほなるものは俳諧ぶらずとて、あやしく世にそむきてたのしまむとす。又まじらひ遊ぶことすら其友どちとまじはらざれば、淋しきやうにおぼえ、まめだちたる人をばうとましとおもひ、いやゝかなる人をばにぶしとおもひ、つゝしみある人をば意おそしと思ひ、短歌よむ人をばかひなしめゝしとおもひ、から歌よむ人をばむつかしと思ひ、わたらひある人をば賤しとおもひ、家を斉るひとをばせちなりとおもふたぐひのこゝろになりゆくは、彼俳諧ぶりよみ出むと深くおもふよりよろづの事世にそむくはしとなる。ひとしからざるか。おのれことさらにさありしほどに今悔ひておもふなり。

綾大理書

とあるのも注意したい。綾足は津輕藩で代々家老職をつとめ、藩主と同姓をも許された上層士分の出であり、出自からしても、また書画に見える優雅な氣品からも、俳諧から片歌への転向は、純雅なものへの憧憬に基くものであり、自己の本質への回帰を意味すると考えられる。（「片歌道のはじめ」等で見ても雅びにたいする病的に近い憧れが感

じられる。)俳諧においては芭蕉があり、国学には真淵があつて、それ以上には出られぬから片歌を唱えだしたといふような伝えもあり、綾足の片歌唱導は野心に基くように考えられがちで、頼原博士の「俳諧史論考」あたりにも、「必ずしも芸術的に真摯な省察から生れた結果ではなかった、」と断言している。綾足でなくてもそうした放言はありがちなことであるが、綾足の場合野心的な動きが目につくために、真意が誤られているようである。誤解を招くような放言をしたことがあるかもしれないし、野心的な動きが無かったとはいえないが、より本質的なものを見失いたくない。綾足なりに正風確立への信念に燃えていたのであるが、境地の深化を見ずに終つたのである。綾足は古雅に憧れたが、川柳は俗に徹して新境地を拓いた。初代川柳が前句付の点者となつたのは宝暦七年、「柳樽」の初篇が出たのは明和二年で、綾足の片歌運動と前後している。

「続近世畸人伝」の記事に妻を代りにやつて真淵について国学を学ばせたとあるが、この妻は名を橘(伎都)といふ、沖津・橘子・伎都子ともある。綾足が宝暦七年三十九歳から同棲した紫苑と同一人物で、はじめは俳句をよみ、句集にも作が見える。<sup>註四</sup>綾足は江戸に下つて母や妹にあつてから、還俗したらしく、はじめ吉原の遊女を落籍したが、長崎へ画の修行に赴いている間に門人と通じたので、その門人に与え、綾足は改めて深川の遊女を妻としたと伝えられる。「続近世畸人伝」によると、伎都はすなわち深川の遊女だった後妻ということになる。<sup>註五</sup>郷党関係の資料には、綾足の書簡をひき、夫妻とも和歌を飛鳥井氏に学ぶとある。伎都は才女で、綾足と同じく片歌や古代風の長歌短歌をよみ、後世風の和歌もある綾足とは旅にも多く同行した。「綾太理家之集」や綾足の紀行中に作がのせてあるが、綾足の優雅な趣に富んでいる。「寒葉斎みちゆきぶり」の末尾の、綾足の病が重くなつてから臨終までの文章は沖津(伎都)の筆で、伎都の歌もまじっている。前身為遊女でこれだけの才があれば相当に評判になるはずであるが、さほど問題にされていないのを見ると、特殊な事情がありそうに思う。

綾足は花山院右府公に乞うて片歌道守と書いてもらい、物事ともしく心のまゝならぬ折は、ひとりこれを仰いで、悶々の情をやったと伝えられるが「仰雲集」に自署したので見ると、「片歌道主」とある。花山院右府公は常雅らしく、元文元年二月から二年六月末まで内大臣に任じ、元文三年八月再任、四年二月退任している。ついで寛延二年二月右大臣に任じ、十一月九日退いた。

註一 頼原博士の「俳諧史論考」の「涼袋年譜」は、宝暦十二年の条に、「草のはり道」成る、「片歌二夜問答」「古今俳諧明題集」刊、等をあげ、同年九月真淵に入門す、とあるが、「涼袋の俳歴」にはこれらを宝暦十三年としているのを見ると十二年は十三年の誤植らしい。中村氏の「建部綾足年譜」(連歌俳諧研究 第十二号) 宝暦十二年の条に、「片歌道のはじめ」をこの頃成るかとし、同年二月信越地方に遊んで片歌唱導につとめたところのは、右の誤りを踏襲したのであろう。これらはみな宝暦十三年のことである。「いをなし草」も「片歌のはじめ」によると、同年に成ったものである。

註二 「古今俳諧明題集」は柱に「古今片歌明題集」とあり、頼原博士はこれが初名であるとしている。(「紀行三千里」に、「ハた久しくおもひ立りし俳諧明題の集、かり寝のいとまに撰すべきところよせたるに、」とあり、宝暦五年ごろ着手しているから、「俳諧明題集」を原名と見てよからう。) 内容は主として麦林系の諸家の句を類纂したものであるが、古今の片歌をも附載し、冒頭に片歌論を説いて、片歌にたいする抱負の一端をうかがうことができる。

註三 島明編の「在りし世語り」に綾足の伝にふれた記事があり、「幼なき時より画を好、風雅に志を寄せて東都に來り、三斛庵を訪ひ、柳居総帥見えて語身を願ふといへども見所ありて請がはず、後には絶交までに及ばれたり、(「国文学研究」第二十一集、前田利治氏「綾足寛え書」)、とあるというが、これで見ると、画はずっと若いころ、おそらく在郷時代から好んだらしい。津輕藩の老侯信寿も俳諧や画を好んだと伝えられるが、綾足が少時寵愛を受けたというのは、信寿である。享保十六年綾足が十三歳の時信寿は隠居し、孫信著が当主となるが、信寿が実権は握っていたのであろう。郷里を出てからは百川との交友から影響を受けた点もあるのであろう。百川は後世南画の祖とされる人物ながら當時は貧しくて画で生活を支え俳諧を楽しんだという。綾足が画を単なるでたと放言しているあたり、百川にならった点が見える。綾足は寛延三年長崎に赴いたころから漢画に心を向け、宝暦四年再度長崎に下った時は、二年余りにわたって画の修業を積んだ。宝暦二年から三年にかけて公奥平氏に仕えたのは、ふつう画技によるように伝えられているが、吟味の余地がある。

## 註四

「紀行草のいほり」に、延享四年江戸に帰って母妹にあつたとき「ハたかゝるさまにていかにあるべき、むかしのすがたにかへりてものせよ、そのことにこそ、」と還俗をすゝめられたとある。やゝ先って綾足の兄久通は、藩主の没後葬送の件をめぐって引責致仕しているから、(寛延元年三十七歳で没)、後継問題など起つていたのかと思う。けれども綾足は奥平氏などの関係でも、困苦しい仕官生活を極度に嫌つていて、この時も、「我仏中の隠士にて、さまでいま／＼しき山伏にもあらず、唯やすかるべしとおもふをは意也……其事此ことも唯時なるべし、」として明答を避けている。しかし寛延三年長崎にくだったころ京都で還俗して名を毛倫といったらしく、当時の見風あて百川の書簡にその旨を伝えている。

## 註五

「津輕書画家伝」の建部綾足の条に、「夫婦は飛鳥井公の門人、又信政公ノトキ西京ヨリ官女致仕ノ女中來リテ師範セリトイフ、」とある。信政では時代が合わないが、信寿の子信興の室(梅応夫人、信著の生母)、は近衛閑白家熙の養女(実は醍醐大納言冬基の女)で、藩の風俗にも影響を与えたという。享保十四年二十九歳で世を去っている。「書画家伝」の記事には誤りもあるらしいが、「津輕藩旧記伝類」にも、大道寺繁禎所藏綾足自筆の書翰をひき、「歌学は飛鳥井家の門人にて、夫婦とも詠歌多し、綾足の妻橘子も同卿の御門人なり、」として、例歌をあげている。

## 三、魚彦・千蔭と綾足

前記のように、綾足は真洌と直接の交渉があつたほかに、真洌の門下を通して県居派と交渉をもち、むしろ真洌との直接の関係よりも深いものがあつたらしい。宇万伎は「県居門人録」によると、延享三年八月の入門であり、綾足は翌延享四年江戸にくだり、浅草に吸露庵を営んだ。綾足はさらに翌寛延元年には金竜山下の吸露庵を人に譲り、並木町に居を移したが、のち宝暦二年、宝暦六年、にも金竜山下に居を定めたという。宇万伎と交渉をもったのは、浅草住のころであろうが、いつごろから明らかでない。綾足の書簡に

田安公の御和学者岡部衛士殿の高弟美樹主野亭の裏の明家へ移り申され候て、万葉集と伊勢物語講釈はじまり候。野子も和学者の岡部先生へ入門仕候。大儀を存立候間容易の事にあらず候、(佐佐木信綱「国文学の文献学的研

## 究」所引）。

とあるので見ると、綾足が真淵に入門した宝暦十三年前後のことらしく、当時宇万伎が万葉集や伊勢物語の講義をはじめていたことがわかる。

魚彦や千蔭との関係は、宇万伎よりも先だち、宝暦十年稿の「寒葉斎画譜」は、魚彦（景良）や千蔭ら画道における綾足（寒葉斎）の門下が同輯したものである。綾足は前記のように若くから画を好んだというが、宝暦初年前後からとくに漢画に心をむけ、修業のため再度長崎に赴いたりしている。画技は活計の手段ともいつているが、生来の好尚に基くものである。千蔭はやくから真淵の門下として重きをなしていたが、魚彦は前年の入門となっている。

魚彦はまた俳諧を通して綾足こと涼袋と早くから交渉があった。下総国香取郡佐原の生まれで、豊後の尾形三郎維義の裔という。享保八年に生まれ、綾足より四年の後輩である。初名は景豊、のち景良に改めた。六歳の時父に死別し、母の手で育てられた。若くから俳諧に興味をもち、俳号を青藍といった。木村捨三氏によると、延享二年刊豊寥和撰の「俳諧職人尽」に、  
下総青藍として、

やまぶしに貰ふて妻き茸哉

という句が出ている由であり、（「国学者研究」）、江戸座の地方俳人としてすでに名があつたらしい。「建部綾足年譜」には、「佐原日記」により、綾足は宝暦二年四月末青藍（魚彦）を下総佐原に訪れ、鹿島詣でをしたとしているが推定らしい。「佐原日記」<sup>註</sup>に、

卯月すえの十日破了なるものといて、香取の浦佐原てふ所にくだる。さるは其所に青藍ぬしまするがまねきたまへるなり。この人春の頃武城にとどまり居て、我に画なんまなべるに……。

とあるが、綾足が画にうちこみはじめたのは、寛延の末から宝暦にかけのところで、青藍の入門はそれからかなり後のことと見なくてはならない。前田氏は、綾足関係の俳書に青藍の句がはじめて見えるのは、宝暦十年九月刊の「俳諧連理香初帖」からであり、右引用文に綾足と同行したという破了は、前号一茶坊で、綾足から破了の名を贈られた由宝暦十年の歳旦帳「絵の山影」に記され、前年に成った「続百恋集」に破了の名が見えるところから、改名は宝暦九年と見、兩人の交渉がはじまったのは宝暦十年としている。けれども右引用文に青藍が招いたとあり、青藍は同年春江戸で画を綾足に学んだゆかりからと見えるが、十年稿の「寒葉斎画譜」を魚彦が千蔭らとともに編輯しているのを見ると、交渉はもっと溯ってよさそうに思う。「佐原日記」の旅は宝暦十年としても、兩人の交渉は宝暦九年ごろに溯るのであろう。「すゞみぐさ」に「下総国牧野は、云々」、とある文章は、六月のことで、別の折のものか。魚彦が真洩の門下となったのは、「県居門人録」によると、宝暦九年のことらしいが、「古学小伝」の真洩年譜には、延享二年のころとあり、小山正氏の「賀茂真洩伝」もこれに従っている。清水浜臣が明和の末年としたのは遅すぎるが、延享二年では早すぎる。宝暦九年あたりが穩当と思われる。翌十年に成った「万葉考」(巻一・二・同別記)の校正を藤原維寧とともにに行っているが、これは後からのことであらう。それにしても正式の入門にさきだち、千蔭などを通して勉強を進めていたのかも知れない。宝暦十一年正月刊の俳書「はしの名」の挿画に青藍筆で老梅を石摺風にし、あとに下総佐原連の発句をのせ、筆頭に青藍の句があげてある。佐原連は涼袋の後援団体の一つで、武蔵・上野・信濃・甲斐等の各所にわたってこの種の連衆があつたらしい。宝暦十三年刊涼袋撰の「一句立」<sup>註二</sup>にも青藍の句がある由で青藍はこのころは画のほか俳諧も涼袋の一統となり、別に古学にも励んでいたと見える。ついに宝暦十三年九月には綾足も国学にひかれて、真洩に入門し、真洩が明和元年浜町へ居を移すにあたっては、兩人ともに協力している。青藍は前から江戸に住んでいたのであるが、明和二年には家を子景序に譲って江戸に出、浜町の県居の近くに居を占め

茅生庵と号した。名も楫取魚彦と改め、国学に専心することになる。宝暦十三年刊の「古今俳諧明題集」（涼袋撰）に青藍の片歌が見え、同年に成った「片歌道のはじめ」（綾足稿）の序文を景良（魚彦）が書いているし、明和二年刊「片歌東風俗」にも青藍の片歌が出ているというから、綾足の片歌説に同調した時期もあったのであろう。涼袋が名を綾足と改めたのも、宝暦十四年（明和元年）の歳且あたりかららしく、青藍も前後して魚彦と称している。

魚彦は以後古典研究と作歌に傾緻し、古語の仮名遣を説いた「古言梯」はとくに名著とされている。「古言梯」はふつう明和二年の上木と言われているが、岡田希雄氏の研究によると、明和五年の末から翌六年正月にかけてのころ開板完成を見たものらしい、（「国語国文」第十二巻第四号、「古言梯の開板期に就いて」）。真洩が直接指導して完成したのである。真洩の「冠辞考」を補った「続冠辞考」「冠辞懸緒」の著もある。和歌は万葉調によった純古代風を得意とし、出藍の誉があった。印象鮮明で、写実的な歌風に特色が見えるのは、俳諧や絵画の素養から影響された点があるのであろう。どちらも真洩に欠けたものであった。画は梅と鯉魚を得意とし、南陀伽紫蘭の狂名で知られた狂歌師窪俊満もはじめ魚彦の門下となって、蘭竹梅菊の四君子を学んだという。魚彦は歌や画で豊前中津侯奥平氏の知遇を受けたが、それについては後にのべる。魚彦は真洩の「万葉短歌新採」「新採百首」にもとずき、万葉集の秀歌を集めた「万葉千歌」をも著しているが、万葉集の末期から多く採る傾向が見えるのは、魚彦の好尚を反映したものであろう（田林義信、「和歌山大学学芸学部紀要」人文科学VI「真洩・魚彦の万葉選歌」）。魚彦は枝直にも師事していた。

千蔭も魚彦と同じく綾足に画を学び、「寒葉斎画譜」の編輯にたずさわっているが、先後関係は明らかでない。同書の跋文をも書いている。先に引いた「県居書簡統編」九八に、綾足につき、「近年万葉を好候て、加藤要人に下直しなど頼候て、此度われら門弟に成候、」とあるから、千蔭は綾足が真洩に入門する以前から古典研究や歌道に関

しても交渉をもち、両者はどちらが門人かわからないような関係にあったらしい。宇万伎も前後して綾足と交渉を生じているから複雑になる。

「綾太理家之集」に、「橘の枝直伊勢物語の詞をくはへてよみておこしたるにこたへて」、として

都とふ鳥なすわれやことゝはむ人のことの葉いかにこたへむ

という歌がある。いづごろのことかたしかでないか、綾足が京都から江戸にくだって浅草あたりに住んだころの作に相違ない。たゞし古字や和歌に興味をもってからで、延享四年の東下としては早すぎるから、明和七年の江戸下りの際の贈答であろうか。枝直筆「伊勢物語抄」が伝えられ、綾足に「旧本伊勢物語」「伊勢物語考異」（ともに明和六年刊）、「伊勢物語古意追考」、等の著がある点から注意される。前記のように、宇万伎も綾足の近隣で万葉集や伊勢物語の講義をしたという。

註一 「国文学研究」第二十一集所収、前田利治氏「綾足寛え書一」による。

註二 一句立は雑俳ではやくから問題になっており、俳諧の「一句立」も幾種か作られたらしく、青藍の句の見えるのは、「佐原日記」附載で、涼袋撰とも、青藍撰ともいう。「佐原日記」や「一句立」についてはなお吟味を要する。

註三 「加藤枝直日記」によると、明和三年九月ごろ、魚彦や綾足と前後して、平賀源内が枝直のもとに出入し、「物類品鑑」「紅毛鳥譜」等を持参、「紅毛細工・国々図画」や火浣布を見せている。明和七年四月には源内作の淨るり「神靈矢口渡」の操りを見に出かけたらしい。源内は讃岐国志度浦の生まれで、長崎に遊んで蘭学を修め、洋画の先鞭をもつていて、四国や長崎に遊ぶことの多かった綾足とは交渉を生じる可能性が多かった。源内は綾足と同じく若いころから俳諧を嗜んでおり、宝暦三年に成った淡々系の俳書に涼袋と源内の句がともに見えるという。「県居雜録」の和銅のことをのべた条に、「……此都に在て物産を専らとする平賀源内といふ人、秩父郡に鍔銅又は金銀の有ことを知て、あまたゝび行けるに明和四年の春、其郡の」とあり、「県居門人録」でも「建涼俗綾足」の次に平賀源内の名が並べてある。源内が正式に真淵に入門したかどうかと思うが、とにかく真淵と交渉をもち、出入りをしたことは右の言葉で疑なく、しかも綾足とはゞ同



時期らしい。青木昆陽（文蔵）も明和のころ校直のところへ出入りしているが、延享元年の「校直日記」で見ても、昆陽は賀茂真淵とともに校直を合せて三人で、定期的な研究会を続けており、晩年に至るまで校直と親交を続けたと見える。（昆陽は明和八年没。）昆陽は物産学にくわしく、蘭学の先達であり、諸国を廻っているので、綾足や源内と交渉をもつ機会があったと思われる。

#### 四、宇万伎について

綾足が、真淵に入門する前後から宇万伎と交渉をもち、古学について学ぶところがあったらしいことは、前に述べたごとくであるが、宇万伎は享保六年（一七二一）の生まれで、魚彦より二年長じ、綾足より二年おくれ、三人ともほぼ同年輩といえる。千蔭は享保二十年の生まれで、ずっと後輩になり、春海はさらにおくれるので、県門四天王のうち年輩では宇万伎が最も先輩ということになる。

宇万伎ははじめ宇麻伎・宇麻岐などとも書き、美樹ともある。正式には藤原河津宇万伎とあり、藤原宇万伎とも河津美樹とも見える。加藤大助とも呼ばれている。河津祐之の養子（葛の掣）で、長夫の義弟にあたる。長夫は和漢の学に秀で、はやくから国学を真淵に学んだが、延享四年に空しく世を去り、宇万伎に志をつぐよう言い残した旨、「加茂翁家集」の哀傷歌の詞書に記されている。明治二十四年刊「皇道伝統録」（田中館甲子郎著）の賀茂真淵の条に、宇万伎を県門の筆頭にあげ、とくに義兄長夫に関し、特殊な逸話を伝えている。宇万伎の義父祐之は戸田淡路守（氏房）に仕えたが、戸田淡路守とは真淵も直接交渉をもっていた。（「県居雜録」）。

宇万伎が真淵に入門したのは、「県居門人録」によると、延享三年で、長夫の死んだ前年である。県居門下としては古参であり、のち魚彦や千蔭・春海とともに、県門の四天王と称されたりしている。真淵は宇万伎を評して、「美

樹は歌はとかくに不好と見えて、さまざまいへども出精なく、但し学事はよほど才有る人なれば其方を賞候」、「（「万葉集巻八疑条」）、「本書申候加藤大助は、拙者門人に一二之仁にて、和漢ともによほど学事は有之、皇朝の古意はよほど通達被致候也」、「（ここにも藤原宇万伎（加藤大助といふ大番与力也）わが流を伝へて、ことに古事紀神代の事を好めり、いまだ其説は口を開かねど、終にはいひ出べき人也、向來御申合候而、野子命後は御此事をはたし給へかしと願事也、」（「県居書簡続編」六七、本居宣長宛、）など極力推称につとめ、和歌よりも学問についてとくに望を嘱しているが、研究においては真洩が期待したほどの業績を残さず、後世は逆に万葉調の歌人として知られている。万葉調といっても、平安朝初期の優雅な作風をもとり入れたもので、古代風と平安朝風を調和させた点に特色が見える。

上田秋成編の「静舎歌集」があること、周知のごとくである。漢詩の絶句も残っている。古典研究では、同じく秋成が宇万伎の没した安永六年に上木した「雨夜物語だみことば」が有名であるが、他に「古事記解」「土佐日記解」「伊勢物語解」「古葉注解」「仮字問答」等の著があったという。「雨夜物語だみことば」は、源氏物語帚木巻の註釈で、真洩の「源氏物語新釈」によった点が多い。他からの依頼で、明和六年大番与力として上京中執筆したものである。「土佐日記解」も明和五年、同じく勤番中に筆を執ったもので、のち寛政二年秋成が修補を加え、享和元年改めて清書している。京都大学に秋成の自筆本が、伝わっているが、簡略なものという。

伊勢物語の註書については、上野国会図書館に、「勢語諸註参解」と題した写本が伝わっており、「末刊国文古註釈大系」に収められたが、契沖・春満・真洩等をはじめ、枝直・諸鳥等真洩の門下知友の諸説を書き入れ、自説を加えたもので、県居派の註書である。真洩を中心に会説を行って諸説を書き入れ、あとで門下の誰かが説を補ったものらしいが、大津博士の紹介によると、光慶図書館旧蔵の「伊勢私記」とほぼ内容同じく、「伊勢私記」は河津祐章著と

ある。宇万伎は河津祐之の養子となつていたので、「勢語諸註参解」も「伊勢私記」も宇万伎と深い関係がありそうである。「勢語諸註参解」は真洩の自著を門下が補つた形になつており、「伊勢私記」は終始門下の自著の形に改められてゐるようで、両書はいくらか形の變つた点があるが、實質はほとんど變つていない。

註三

「静舎雜著」は中村幸彦氏の紹介された「静舎隨筆」と同書であらうが、「静舎隨筆」には仮字や音声に関する田安宗武との問答も収められてゐる。これらは「仮字問答」や「声音問答」の名で伝えられたものらしい。魚彦の「古言梯」の附言にも「い」「あ」の區別に関する宇万伎の説をひいており、「琴後集」にも語字に関する逸話を伝えてゐる。古語にたいする造詣には定評があつたようであるが、真洩の短所を脱けきれない点も見える。「古事記解」や「古葉注解」については、伝来が明らかでない。真洩はとくに宇万伎の古代研究に期待するところがあつたようであるが、宇万伎の好みとしては平安朝の初期の古典にとくに興味をもつたらしい。「古今集注解」などの著もあつたと見え、高田与清は「擁書漫筆」に、「伊勢物語古今集などの注釈は、こよなうよろしきことわりなりときこゆれど家にひめて世に出さざれば、見るによしなし、」とある。<sup>註四</sup>木曾路を通じて上京した時の「岐岨路日記」や東海道をくだつた時の日記もある由で、文才にも秀でていた。情味に富んだ性格の持主で、家集に、「世にたづきなき人三人四人吾を頼みこしけるに、今はいとわびぬれば、人やしなふべき身にあらず、されどいかでと思ふ頃たづの鳴き渡るをききて、」と詞書して、

世の中のうき人の子をはぐまむ翹かしてよあめの鶴むら

「又おもひわづらひて、」として、

天地におほふばかりのつばさもが憂世の人をはぐくみなまし

などよんだ歌がある。すねものの秋成にたいする温情も、そうした性格の反映であらう。

実子がなかったと見え、養子が後をついでいる。

宇万伎は、宝暦十年に成った真洩の「万葉考」巻一・二・同別記の編輯を尾張黒生や村田春郷（春海の兄）とともに手つだい、藤原維寧・楫取魚彦が校正を加えている、（校正は後からであろう。）綾足の寓居の近くに住んだのはそれから二三年後のことで、綾足が真洩に入門した宝暦十三年九月の前後のころと思われる。前期のように宇万伎は当時万葉集や伊勢物語の講義を行ったという。綾足はすでに千蔭や魚彦とは、画を通して師弟関係にあり、宇万伎とも親交を結んだ。真洩が後になって、宇万伎の近隣に借宅してこゝかしこ（真洩の説を）聞きそこなった、と言っているのは、このころのことであろう。

「静舎隨筆に」よると、宇万伎の仕えた戸田淡路守氏房は冷泉為久の門下で、宇万伎は氏房の蔵書で勉強したとい

註五

う。（為久は契沖の「契語臆断」を推称したともある）。氏房は為久の子為村の門人にもなっており、京都方面の堂上派歌学の影響が考えられる。氏房は宝暦九年に没し、子氏之が後を嗣いだが、宇万伎はひきつゞき氏之にも仕えている。宝暦十一年四月主君に従い日光廟に参詣した。同年五月十六日妻（葛）を失っている。妻は河津祐之の女で、当時二十一歳であった。宇万伎は四十歳になっているはずで、年齢の開きがありすぎるが、特殊な事情があったためである。（後妻は上田秋成の「文反古」に八代子とある）。戸田家の家臣とあるところから、森銃三氏は宇万伎が幕府の大番騎士（すなわち与力）となったという伝えを疑っているが、佐佐木博士「賀茂真洩と本居宣長」の「賀茂真洩伝資料」に引く真洩の書簡に、「平三郎加増により、去暮など安心いたし、賑ひ候……河津宇万伎、大番与力株を求め候うて、旧冬おしつめ浅草新堀へ引こし候、これも大慶いたし候、よき株にて、本高二百表の地方故に、三百表余になり候と申候、三年一度、京か大阪へ上り候也、」とあり、実際に大番の与力として勤仕したについても種々資料があるので、否定できない。大番役となった戸田淡路守氏之の配下として大番与力を勤めたのである。たゞし宝暦

九年に大番与力として京撰へ上ったとの伝えは、「古学小伝」の説によったものであろうが、現在確かめ得る限りでは、宝暦十一年七月から翌十二年八月にかけて、大阪勤番となったのが最初である。「静舎歌集」に記事があるが宝暦十一年主君に先だつて、木曾路をへて難波に赴き、翌年八月に東海道路から江戸に下っている。有名な「桔梗が原」の歌もこの時の作である。ただし、大番与力としては、昭和三年七月から四年八月にかけての大阪勤番が最初らしい。「平三郎加増により云々、」とあるが、平三郎（真淵の養嗣）が明和元年百俵五人扶持下賜となったのをさしたものであるべく、宇万伎が大番与力の株を買ったのは、前年の宝暦十三年か翌十四年（明和元年）あたりと推定してよい。ちようど綾足が宇万伎と交渉をもちはじめ、真淵に入門する前後にあたる。（「三年一度京か大阪へ上り候也、」とある。）ついで明和五年二条城御番として上京したが、事情あつて滞在が長びき、明和七年大阪に移り、同年江戸に下った。さらに安永六年四月、病後を推して二条城御番久留島信濃守通祐の組頭として上京したが、「雨夜物語だみことば」上木の後間もなく、六月十日三条通大宮の仮寓で世を去った。墓碑は同所三宝寺にある。

以上宇万伎について縷説したのは、宇万伎が綾足と秋成、したがって真淵の国学と秋成をつなぐ橋わたしになっているので、そうした点に関する考察の準備としたからである。

註一 真淵の説を宇万伎が聞書したものととして、「土佐日記註」（「土佐日記考証」所引本・荻谷図書館本）、「土佐日記註」（松尾神社）、あるいは「土佐日記抄」（静嘉堂文庫・無窮会神習文庫・倉野憲司所蔵本）の名で伝わるものがある。「土佐日記聞書」、あるいは「土佐日記県居説」（倉野博士紹介）として伝わるものもある。

註二 太津有一博士の「伊勢物語古註釈の研究」に二書を紹介し、両書の内容の共通性に注意し、かつ「伊勢私記」の著者祐章は宇万伎かとしている。浜臣本の「県居門人録」によると、

藤原信義

祐章後静夫

とあり、「岡部部家文」に収めた「隅田川に船を泛て月を翫ぶ歌並序」、に右三人とも歌文をのせている。上野国会図書館蔵「麓廬塵」によると、(「日本及日本人」昭和十五年一月月号所載、丸山季夫「加藤宇万伎」紹介、)祐章はすなわち長夫で、実は祐之の弟に当るが、兄祐之の没後、あとをついだのである。宇万伎はさらに長夫が死んでから、葛の婿となっている。長夫は将来を嘱望されながら延享四年に世を去っているので、有名にならずにしまったのであろう。祐章すなわち長夫とすると、「伊勢私記」は長夫の著で、「伊勢語諸註参解」も貞淵を中心とした伊勢物語会読の書入本を宇万伎が補ったことになる。長夫の自著の形に改められた点が「伊勢私記」と「勢語諸註参解」と異なるのである。宇万伎の「伊勢物語解」というのはこれらをさすのかも知れない。

註三 中村幸彦氏の紹介によると、前者は明和八年三目のころ、田安宗武の問に答えたものの、後者は明和二年九月或人の問に答えたものである。前者は貞淵の没後宗武との交渉を示す資料として注意されるが、宇万伎には別に、「十二月の名考」という月名に関する考証があるが、(静嘉堂文庫蔵「勢語意断別勘」と同綴)、末尾に「藤原宇万伎上」とあり、やはり宗武あたりの問に答えたものらしい。

註四 この時の歌は「静舎歌集」に抄録されており、詞書で日記にも言及している。

註五 中村氏の紹介による。戸田淡路定氏房は、美濃国大垣新田野村の領主で、大垣城主戸田氏の分家である。大垣城主の戸田氏は信州松本城主の戸田氏、下野宇都宮城主の戸田氏の同族で、先祖は源義家より出で、のち藤原氏を称した。

南朝に属し、戦国時代三河国田原城に拠ったことがある。氏房は京都所司代、大番頭、等をつとめたが、宝暦八年致仕、翌九年五十六歳で没。氏之が後を嗣いだが、宇万伎が氏之配下の大番与力となったのも右のような関係からであらう。

註六 「片歌道のはじめ」に、「小泉てふ所に古城の跡あり、なぞの人こもりていづれの軍にかかくあけけむと問ふに、なにくれとかたる」として、

ものゝふのかばねやいづらいまはたゞ花さおくかとなりけるかも

という歌をよんでいる。宇万伎の桔梗ヶ原でよんだ、「ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風寒し桔梗ヶ原」という作を連想させるところがあり、影響関係があるのかも知れない。「片歌道のはじめ」の旅は、宝暦十三年の二月末に出かけ

て、六月のはじめに終っており、宇万伎の上京の翌々年にあたる。宝暦四年信濃路をへて長崎にくだった時も、綾足は桔梗ヶ原で句を残している。なお土屋雅夫氏によると宝暦十三年九月「古今片歌明題集」（「古今俳諧明題集」）雑の部に、青蘆（魚彦）の片歌に並べて静習の片歌がのせてあるという。静屋を宇万伎の号とすれば、魚彦とともに綾足の片歌論に同調したこともあったことになる。もとより一時の酔興として終ったことであろうが、綾足と宇万伎が後年に至るまで交り続けたのは、そうした因縁によるのかと思う。宇万伎が大番与力株を買ったのも、この前後のことらしい。ただし「古今俳諧明題集」は宝暦五年長崎に遊学中着手しており、俳諧から片歌への過渡期のものである。

註七 「万葉集傍註」の宇万伎書入本の奥書に、「宝暦十三年末十一月廿七日於日本橋貞木佐久櫓物坊之不勢盧再考畢 藤原河津宇万伎」、（卷二十）、「宝暦十四年正月二日於日本橋櫓物坊寓居校訂畢宇万伎」、とある由で、（佐佐木博士「万葉五十年」）、宇万伎は宝暦十三年の十一月末から同十四年の正月はじめにかけては日本橋に寓居を続けたいらしい。したがって大番与力の株を買ったのは宝暦十三年でなく、十四年（明和元年）ということになる。これらの点については、なお綾足の言葉に、近隣に宇万伎が借宅した前後に真淵に入門したとあることも参考して、吟味を加える必要がある。（恵岳の「万葉集傍註」は宇万伎の没後に成ったものであるが、書入本というのは、前野貞男氏のいうように、宇万伎が他の書に書入れたのを転写したものか。「大日本歌書総覧」に宇万伎書入万葉集というのを紹介しているが、寛永本に契沖の説を書き入れ、さらに宇万伎の説を加えたものらしい。）

## 五、綾足・宇万伎・秋成

上田秋成（一七三四—一八〇九）は、明和三年「諸道聴耳世間猿」を上木し、「世間妾形氣」を書いた、（後者は明和四年一月刊）。ともに八文字屋本系統の浮世草子で、秋成らしい独創性は稀薄であるが、読本発達史上に時期を画した「雨月物語」は、自序で見ると、「明和戊子（五年）晩春」に成ったとしている。同じく読本の発達史上に特殊な意義をもつ「西山物語」も釈敬雄の序は明和五年二月に書かれ、直ちに上木された。「雨月物語」は刊期不明の

板本もあるが、刊期に見えるのは、九年後の安永五年に上木されている。序文と刊期が距りすぎるので、「雨月物語」を明和五年の成立のように言っているのは、秋成が綾足と対抗するために、「西山物語」と前後して成ったようにつくろったとする説も出ている、(「国文学」昭和三十四年六月号、鶴月洋、「秋成文学の展開」)。鶴月氏の説は確実な根拠に立つものではなく、成立と刊行の時期が距り過ぎること、秋成の綾足蔑視、秋成の宇万伎に入門した時期を明和四年前後とすると、秋成が国学を身につけ得たのは、明和の末から安永にかけてであろうこと、などを理由としている。けれども真実をあれほど尊んだ秋成が、そうした虚構を敢てしたとすれば、秋成の人間そのものが蔑視を招くことになる。どんなに軽蔑したとしても、暫くでも綾足に学び、宇万伎にたいして紹介の労をとった人物である。そうした人間と戯作の功名を争うために虚構を敢てするであろうか。「雨月物語」といえば、今日は高く評価されているが、作者の主観からすれば、序文にもあるように「鼓腹之閑話」であった。「鼓腹之閑話」は文字通りにはうけとりがたいとしても、和漢の古典の換骨脱胎でねりあげた作品に、さほどの熱意を感じたであろうか。誤診から人の子を死なせたのを恥じて医業から遠ざかったという秋成としてふさわしくない。かつ「雨月物語」の序文は、「明和戊子晩春」(五年三月)となっているが、「西山物語」の序文よりも一箇月おくれで書かれたことになる。先後を争う気があるなら、もっと溯ってよさそうである。

「雨月物語」の成立は、秋成と綾足や宇万伎と交渉を生じた時期とも関係するが、秋成の宇万伎に入門した年時については、明和三年明和七年、の二説が古くから見え、最近明和四五年あるいは明和四年ごろと見る説が有力になってきた。しかしなお疑問が残されているので、改めて吟味して見る。結論から先に言うと、明和三年説も、明和七年説もともに誤りで、秋成が綾足に学んだのも、綾足を介して宇万伎に入門したのも、明和四年と断定してよいと考えられる。



明和三年の入門とするのは、藤井乙男博士の説であるが、博士は、明和二三年ごろ綾足が京阪に漫遊に赴いた時、秋成も一時会筵に列なつたが、面白くないので、のち綾足の紹介で宇万伎に就くことになつたらしい、とし、秋成の宇万伎に入門した時期を明和三年七月と見ている。丸山季夫氏はこれにたいして、「秋成の宇万伎入門の年代其他」(「吾妹」昭和十一年二月号)等を書き、明和三年説を斥け、明和七年説を説いた。

丸山氏は、藤井博士の明和三年説は、「歌鳥稻荷献詠和歌序」(天保二年藤田顛筆)に、「明和丙戌(三年)之秋從<sup>ニ</sup>加藤美樹<sup>ニ</sup>学<sup>ニ</sup>皇学之古風<sup>ニ</sup>三年能達<sup>ニ</sup>故事<sup>ニ</sup>云々、」とあるによつたものごとくであるが、この序文に信じがたい節があること、博士も認めているとし、異本の「胆大小心録」に、

初めは綾足が教へよといふについて学んだれど、とんと漢字の読めぬわろで、物問ふたびに口をもじくとして其後にいふは、幸ひ御城内へ宇万伎といふ人が来ている。是を師にしていふたが縁じやあった。江戸人なれば七年が間文通で物問ふ中に、五十そこらで京の城番に上つてお死にやったのちは、よん所なしの独学の遊びのみにて、目があいたといふ。

とあるのによつて、宇万伎の没した安永六年(一七七七)六月から溯つて、明和七年(一七七〇)の入門と推定している。重友博士も明和七年説に従っているが、右の文章を根拠としており、丸山氏の意見を踏襲したのであらう。

(たゞし博士は明和七年と断定したのではなく、疑も残している)。しかし七年間文通で学んだとあるのを、そのまゝ正確に受けとつてよいであらうか。文通で学ぶ以前の従学も考えねばならないし、七年といつても、厳密に七年と見てよいかわからない。

宇万伎の著で、安永六年秋成の校刊した「雨夜物語だみことば」には、明和六年の宇万伎の自序があるが、それによると、宇万伎は一番与力としての勤番で明和五年の夏から京都に滞在していたのであり、そのころからすでに秋成

との間に交渉を生じている。宇万伎は自序で同書成立の由来をとき、江戸の方からある人が、安藤為草の説（「紫家七論」であろう）に教えられ、娘の教養のために源氏物語の雨夜の品さだめを読ませたいから、と手ごろな書を求めてきた、ところが思いがけない災厄で宇万伎の滞在が長びいたので、滞在中強いてまとめたものだとしている。

まことに去年の夏より、やましろの大城をまもらへるに、ゆくりなきわざハひありき。やがて大門守るあやまちのとおひて、ひとゝせのまけハはてぬれど、ともにかへることをえず。大やけにしてのりわけたまふをまちつゝかしこみとゞまりをるに、としの半も過にけれど、いまだおふせごのきこえねバ、ふるさと人にまのあたりせんハ、いつをはかともはるかになん、おもふたまへらるゝ。もとよりいなむべき中ならねバ、この一巻をときうべきさまにかきいだしておくりつるなり。ひがごともおほかりなん。よくしれる人たゞしなんことをおもふのミ。

明和六のとし神なつきばかりやましろの大城にうづくまりをりてかきつ、

藤原宇万伎

災厄というのは、城内で公金盗難事件が起り、（通説に大阪城内のこととするのは誤伝で、京都二条城でのことらしい、）宇万伎はお役目がら嫌疑をかけられ、取調べが続いたのである。のち犯人がわかり、嫌疑ははれたが、まことにとんだ災難であった。秋成の序には、

おもふに一とせこゝの大城守るまけにして、そがいとまにはおのれがいほのあたりよぎられけるまに／＼ふる言のかたはしをも問ひまなびつるついでに、此ものがたりの事をもかたりいでてそこらとひつゝ、やがてこゝの里びごともてかたはらに書そへておもふむねをも聞えしかば、たゞほゝゑミてうなづかれしまゝになむ侍りし。

とあって、当時すでにかなり親しい交渉を生じていたことが知られる。「土佐日記解」は前年の明和五年七月廿日に稿を終っているが「雨夜物語だみことば」はそれにひきつゞき成ったことになる。

とにかく「雨夜物語だみことば」は明和六年十月に稿が成ったのであり、秋成の入門はそれ以前と見なくてはならない。かつ秋成の序文に見えるように、宇万伎が秋成の住居にしば／＼立ちより、秋成が源氏物語について自説を書いてさしだしたところ、宇万伎は微笑して受けとったとあるような親しさを生じるまでにはある程度の従学期間を考へなくてはならない。

宇万伎は明和三年で大阪に勤番にのぼり、翌四年八月に帰った。「静舎歌集」に

難波なる秋成が馬のはなむけして、白雲もいゆきはゞかる富士のねのあなたにかへる人のわかれば、とよめるに

あづま路の富士のしば山しば／＼も馴れて物思ふ別れするかも

とあるのは、二月末住の江に遊んだという記事の後にでゝいて、「一とせの任はてて八月十日あまり大城を出でて、二十日まり三日故郷に帰りぬ、云々、」とした文章に先行し、明和四年のことと考えられる。したがって宇万伎が明和三年から四年にかけて勤番に赴いたとき兩人の交渉ははじまっていたことになる。中村氏の紹介によると、「文反古」の自筆草稿に「藤原宇万伎ぬし、難波の任みちてあづまに帰らせし時奉れるふみの御答」、の一通があり、「是は初めてたいめたまはりし時の別れ也」という註記（明和四年のもの）が着いている由であるが、彼此符合する。

消息の文面によると、「一日まうのぼりしふしは、何くれとあるじしたまひしぞかたじけなき、」「いもの君へもくれ／＼よきにきこえたまひてよ、」などあって、親交のさまが思いやられる。住の江等に遊んだについて案内は秋成あたりがつとめたのかも知れない。源氏物語について問いたゞしたり土佐日記等の講義を聞いたのも、この勤番の折のことらしい。

かくて秋成は明和四年には宇万伎と相識になっており、明和三年説が正しそうにも考えられるが、秋成は宇万伎と識る前に綾足に接し、綾足を介して宇万伎に就いたと言っているので、綾足との関係も考え合わせる必要がある。綾足は明和二・三年ごろは上京の形跡なく、明和五年二月釈敬雄筆の西山物語序に、「客歳遊乎平安下帷講授、」とあるごとく、上京は明和四年のことらしい。明和三年に成った綾足の「三野日記」に、「かねてからはと思ひたてることのあるに、来年のむつきばかりはめこさへつれて都にまうのぼるべきなり、」とあり、三年には翌四年正月上京の覚悟でいたようであるが、三年に愛児年外沙弥を失い、旅行中支障が起つたりして、四年正月には上京が実現しなかつたらしい。（「三野日記」は石田元季博士が「俳文学考説」において注意し、最近「国文学研究」第二十一集に前田利治氏も引いている）。が宇万伎と秋成の交渉がやがてはじまっているのを考えれば、明和四年正月を余り遠ざからない時期に上京したのであらう。二月の末に宇万伎の一行が住の江に遊んだとき、秋成が同行したとすれば無論であるが、そうでなくても、八月に宇万伎が江戸に帰るまでに秋成がかなり親しくなっている点から見、綾足の上京はさほど予定より遅れたとは思われない。

綾足が上京してから秋成が綾足の講義をきき、それから宇万伎に紹介されているのである。秋成が綾足に接したのは前掲「胆大小心録」からの引用文に、綾足の語として、「幸ひ御城内へ宇万伎といふ人が来ている、」とあるので見ると、大阪でのことらしい。（中村氏も「新撰俳諧年表」明和四年の条に「涼袋大阪に上る、」とあるのを注意している。）難波は野坡以来の関係で綾足には旧知が多く、上京とともに難波に歩を延ばすことはあり得ることである。とくに宇万伎とは前記のように江戸で親交があり、「綾太理家之集」に宇万伎が勤番を終って帰るのを送った長歌が見える。真淵からは遠ざかって、宇万伎との関係は続いていたのであらう。宇万伎は嫌疑がはれると、明和七年初春難波に移り、同年秋江戸に帰つたらしい。綾足は日本武尊の建碑に夢になっていたが、明和七年やっと、本望を

果すと、同年十月、宇万伎に続いて江戸に下っている。宇万伎の東下は江戸の中島氏から画技を教えるよう請われたためで、妻伎都は残し、養子の房（総）丸を同行した。この時の紀行が「時雨日記」である。

「賀茂翁遺草」所収「佐野昌次がもとを訪ふ記」の末尾の識語に、「宝曆辛巳歳季秋写畢 洛西隱士無腸誌」とあるが、宝曆辛巳は十一年で、無腸は秋成の俳号である。識語に誤りがないとすれば、秋成は綾足や宇万伎にあう前に真淵の歌文を写し、私淑するところがあつたかと思われるが、右の文章は、文政四年伴直方書写、文化十三年長野美波留書写等とある文章の後に載せられたものであり、無腸も秋成の俳号としては宝曆より時代が下るようで、右の識語には疑問があるので、しばらく考慮外におきたい。秋成が宇万伎に直接学んだのは、明和四年と明和七年、宇万伎が大阪に勤番した折で、以後は主として文通によつた。秋成が「胆大小心録」に七年の間文通によつて学んだといっているのは、明和七年宇万伎が帰府してからのおよそをさしたことになる。

明和四年は綾足四十九歳、宇万伎四十七歳、秋成は三十四歳であつた。明和四年宇万伎が秋成にあてたと推定される書簡に、「こんとは阿妻へまうで給ふべく、うち／＼にはおきて物し給ふとなん、」とあるので見ると、秋成は宇万伎とあつてから、江戸下りも考えたと見える。真淵の生前に面識を得ておこうといったような願いもあつたかと思われるが、翌年秋成が火災にかゝり、明和六年には真淵も世を去り、東下は実現を見ずに終つた。秋成は前記のように、宇万伎から土佐日記や源氏物語の講義を聞いたが、古今集の講義も聞いており、「万葉考」を写したり、日本紀の宇万伎書入本を借り、契沖の説と照合したりしている。万葉集や源氏物語が「雨月物語」に深く影響を与え、「春雨物語」の「海賊」等に土佐日記の影響が見えるのは、そうした関係からであらう。（「雨月物語」の成立は秋成の宇万伎入門より後で、成立後も改稿加筆が行われたので、宇万伎から学んだ古典学の影響は当然考えられる。）秋成は和歌の添削をも請うた。宇万伎は勤番の途すがら時々秋成の家を訪れたとあり、秋成から書物を借りたりしたこと

もあったのであろう。雅遊をともしたことにもあり、宇万伎は木村兼葭堂等秋成の周囲の雅客とも相識になったらしい。安永六年六月十日、宇万伎が京都の仮寓で病死するや秋成は大阪から上京してなにくれと世話をし、遺髪を江戸の末亡人八代子に送ったりした。

秋成の宇万伎入門を明和四年ごろかとする説は、中村幸彦氏が「山辺道」第四号、「解釈と鑑賞」昭和三十三年六月号、等でといっているが、断定には考慮の余地を残しているので、別途からの考察をも加えて、確かめたのである。氏の論文が発表されるに先だち、自分も「雨夜物語だみことば」等から、明和五年ごろまでという推定に達していたのであるが、氏の論考や綾足関係の資料を総合し、明和四年と推定に落ち着くことができた。「雨月物語」と国学の関係等の問題にもつながるので、一、二年の先後が大きな意義をもち、是非とも明らかにしたい問題であった。

綾足の「西山物語」が出たのと前後して、伊勢の荒木田麗女が擬古物語に筆を執りはじめた。麗女は連歌から出発しており、麗女と綾足との交渉の有無も問題とされてよい。

註 綾定は明和六年ごろ兼葭堂を訪れ、明清名蹟を臨写、「建氏画苑」に載せているが、「綾太理家之集」に兼葭堂を讃えた長歌が見える。兼葭堂は難波に生まれ、博学多芸で、書画詩文に長じ、本草学を極めた。蒐集家としても聞えた。沈南蘋の画風を学び、大雅の門人ともなったりしたから、綾足とは肌合いの共通した点が多かった。綾足よりいくらか後輩になる。(兼葭堂はのち「建氏画苑」の序文を書いている。)宇万伎が再度の勤番で京撰に滞在したころ、秋成がさしたたと思しい書簡が、「師また三年経て後の御役立の時に聞え給へる御文」として「文反古」に見えるが、宇万伎を清遊に誘って「細合方明、木村孔恭等舳艫に参るべく、桂常政御あつらへの絵捧げて是もと申、ひとくともに猶御名残の御物がたり承るべく、云々」とある。文中に「御出立もはどなく待るには、」と見えるから、明和七年難波に移り、宇万伎の江戸帰府に先だつてのものらしい。兼葭堂は秋成を介して宇万伎とも交友関係があったのであろう。綾足も宇万伎も難波の文人墨客を中心とした交友圏中の人物となっていたのである。

## 六、秋成の古典学と「雨月物語」

ついでに「雨月物語」を中心として、秋成の古典学と創作との関係を見ておきたい。

この点について参考になるのは、よく引かれる「胆大小心録」の記事である。

わかい時は人まねして、俳諧と云事を面白くたふとがりしが、歌よみ習ひて後も、時々言て楽しむ也。歌は中／＼よみえられぬ事じやと、思ひたえて在しが、人のすゝめにて、何がしの中納言様の御点をかけさせ給ふが有がたかりしにつきて、所々しらぬことのあるは問奉りしに、そちは心ざしのよい者じや、考ておこぞ、とおしやつてついに御こたへなきに心さびしくて、契沖の古語をときし書どもをあつめてよんだれど、猶所々にいぶかしい事有て、ふしぎに江戸の藤原の宇万伎といふ師にあひて、其いぶかしき事どもをつばらに承りしが、此師も我四十四五歳さいの時に、京の在番に差れて上りたまひしが、ついに京にてむなしくなれし也。齡は五十あまりにて有し也。あたらしになげゝど、我もその比はくす士の業をつとめて、日々東西南北と立走りしかば、又よき師につきてとも思はず。四十三歳より五十五歳まで怠りなくつとめしかば、稚きより習はぬ事にて、ついに病に係りて、田舎へ養生のため隠居せしが、暇多ければ、又思ひ出して、魚の千里の学びをせしほどに、又師がいひし事にも背られぬ事どもありて、本かへりて見たれば、大かたに心得らるゝやうなるが、猶しれぬ事は、陶淵明のおしやつたにつきてさしおきぬ。或人云、しいてしれぬ事をしらんとするは、かへりて無識じやとぞ。是は聞えたとおもふて、しらぬ事に私はくはへぬ也。又此古言をしいてとく人あり。門人を教への子と云て、ひろく来たるをあつめられし人あり。やはり此人も私の意多かりし也。伊勢の国の人也。古事記を宗として、太古をとくとせられしとぞ。翁口あしくて、

ひが事をいふて也とも弟子ほしや古事記伝兵衛と人はいふとも

独学固陋といへど、其始は師の教へにつきて、後々は独学でなければと思ふより、私ともいへ何ともいへ、独窓のもとに眼をいためて考へて見れば、どうやら知れぬ事も六七分はしれたぞ。

これで学習過程の大よそが知られるが、藤井乙男博士が「江戸文学研究」に「自筆本胆大小心録」として紹介された異本には、次のようになっている。

翁わかき時は俳かいとかいふ事を習て、凡四十ちかくまではよりほかの遊びはなかりし。其時は師の口まねせん何がしのやうにはえなろまいとのみ思しに、四十にならん頃に人のいふは、歌よめ、はいかいはいやくとぞいひしかど、歌はお公家さまのまねが出来るものかといひしかど、すゝめるにまかせて、しものれいぜい殿のお点をこひしに、そなたはよい口じやおほめなされて、物とへば、しほらしい事よく問ふ、いつぞは考へておかうとおしやつて、ついに御返答なし。契沖の著述をかいあつめて独学のあいだまた二三年、うま伎といふ人において、師とかしづきたれど、江戸の人故七年があいだに、文通でとふた事わづかなり。此師も五十過てはやく世をさらせしかば、又独学にて、それも市井の医の奔走にいとまなければ、こゝろにおもふたばっかりじや。いせの宣長といふ人の著述を、人のつてにてかりしが、是も心にたがふ事多し。おもへば、歌も文も云たい事いふて遊ぶがよしと心がついて、師家といふわる達のいつはり言もしれて、これから誰にも交はるはいらぬ事と決したりし。（「日本古典文学大系」所収「上田秋成集」参考。）

双方を対照してみると、秋成の古典学の輪郭がわかるが、宇万伎に学ぶ前に、若いころ俳諧に親しんだこと、のち和歌に志を向け、下冷泉家の中納言に学んだが失望し、契沖の著書に独り親しんだこと、などが注意される。さらに「秋成遺文」に収められた「異本胆大小心録」には、



わかい時は人のすゝめで俳かいといふ事習ふたれば、さつてもくよい口じやとほめられたので、四十にちかひまではを学ぶにひまがなかった。人の云は、歌よんだがよい、俳かいはいやしい物じや、といわるゝに、ふと思ふたは、歌はお公家さまの道じやとおしやれば、こちとのよんだとてと思ふたけれど、人のすゝめて下のれいぜい様へ入門したれば、さてもそなたはよい歌よみにならりや、問やる事どもは追てこたよふ、とおしやつてそのこたへなし。契沖の著書を買ひ集めて物識にならうと思ふたれど、とかく疑のつく事多くて、道はいかなんだを江戸の宇万伎といふ人の城番にお上りで、綾足が引合て弟子になりて、古学と云事の道がひらける。はじめは綾足が教よといふについて学んだれど、とんと漢字のよめぬわろで、物とふたびに口をもじくとして、其後にいふは、幸い御城内へ宇万伎といふ人が来てゐる、是を師にしてといふたが縁じやあつた。江戸人なれば七年が間文通で物問ふ中に、五十そこらで京の城番に上つてお死にやつたのちは、よん所なしの独学の遊びのみにて、目があいたと思ふ。

とあり、宇万伎に就く前に綾足にも学び、綾足の紹介で宇万伎を知つた経緯がわかる。

秋成が俳諧に親しんだのは、二十歳のころからで、はじめ梅翁宗因すなわち談林の風を慕ひ、のち其角門の淡々の一派と交り、几董の父几圭に師事したりしている。(几圭は巴人門で、其角の孫弟子に当る。)  
「胆大小心録」では四十歳近くになってから和歌に志を向けたように書いているが、三十代になるとほとんど句が見えず、俳諧に親しんだのは主として二十代のことらしい。(几圭は宝暦十年、秋成二十七歳の時世を去つた。)もつとも「歌よみ習ひのちも、時々云てたのしむ也、」とあるように、和歌に親しみだしてから、全く俳諧を捨てきつたのではない。秋成の俳号は無腸で知られているが、若いころは漁鳶といったらしい、(「連歌俳諧史研究」第十号、中村幸彦氏「上田秋成青年時の俳諧」)。御園とするのは漁鳶の誤りかという。

秋成は四十歳近くになってから和歌にとくに志を向け、下冷泉家の中納言に点を乞うたと言っているが、下冷泉家の中納言については、中村幸彦氏は冷泉為榮とし、(岩波「日本古典文学大系」)、丸山季夫氏は「義正聞書」に見える下冷泉宗家かとしている。<sup>註一</sup>冷泉為村は安永三年六十三歳没で、秋成よりも二十三歳年長で、全国に門下が広まっています、為村あたりと見てもしっくりするが、上冷泉家である。いずれにしても公家系統の歌人の門を叩いたのである。「そなたはよい口じや」とほめられたとあり、お世辞としても相当な歌才を認められたのであるが、自分ではあきたらずに去り、契沖の著書に親しみ独学をはじめた。古典を自分の目でながめはじめたのはこのころからであろう。<sup>註二</sup>丸山氏によると、契沖の著書に親しみだしたのは、芦庵とも親交のあった小島重家の奨めによるものという。

「胆大小心録」の記述によると、綾足や宇万伎と識ったのはそれからであるが、綾足や宇万伎と識ったのが前記のように明和四年とすれば、秋成が三十四歳の時で、四十歳近くになってから冷泉家の点をうけ、それから綾足や宇万伎に接したとある記事と矛盾する。下冷泉家の点をうけて、のち綾足や宇万伎を識ったとする秋成の記憶に混乱があったか、もしくは四十に近くなってからというのはごく大ざっぱに言ったものと解するよりほかない。後者と見るのが自然であり、いくらか記憶の乱れも手つだったのであろう。三十代から作句が少なくなっているのを見ると、三十代になると間もなく和歌に興味をひかれはじめたのではなからうか。明和三年三十三歳の冬に成った「世間妾形氣」には狂歌二首がよみこまれているのである。丸山氏は、「世間猿」や「妾形氣」には万葉集の影響が見え、秋成の万葉集をはじめて手にしたのは明和一・二年ごろかとしているが、(「吾妹」昭和十一年五月号、「上田秋成と万葉集」)秋成と契沖との関係はずっと早くからはまっていそうである。

「胆大小心録」に、懷徳堂書院のことを述べて、

大阪の学校とは潜上な名目、郷校でも過た事よ。費舎といふがあたり前じや。開師三宅石庵は王陽明の風な学士

じやが、篤学でしんせつでよかった故、富豪の者がよって贅舎をたてゝすました事じや。京の人で、もと俳諧の士じやげな。つききけばきたない事じや梅だらけ、ひつつかんだ口には、芭蕉などゝ云こしらへ者が、よりつける事じやなかった。

段々世がかわって、五井先生といふがよい儒者じやあった。今の竹山履軒はこのしたての禿じや。契沖をしんじて国学もやられた。続落くぼ物語といふものをかゝれて、味噌つけられた事よ。

今の儒者は、翁が若い時の俳かいしにもおとつた相場じや。今橋の学問所（懷徳堂）万年先生の時は、さして学問をさすではなしに、むすこを先あづけて、よい事を少しでも聞す事のみ。又金づかひになりをと、さそくあづけてをく所也。先生かたく門を出さず、たばこ盆のさうじ、茶の給仕、羽織着せずつかはれたで、心はついに改まる事じやあった。竹山履軒も茶やへはゆかねど、ひやうしやう物をいふて、おもしろがらす也、云々。

などあるが、これらの文面から考えて、秋成も懷徳堂に少時学んだことがあるらしく、とくに和漢の学に進詣深く、契沖に私淑した五井蘭洲について、「五井先生と云がよい儒者じやあった。……契沖をしんじて国学をやられた、」と敬愛の情を示している点、秋成の古典学との関係が注意される。文中に見える石庵・万年は同一人物で、三宅観瀾の兄である。享保十五年六十六歳でなくなっているから、秋成は石庵から直接教を受ける筈なく、伝えによって書いたであろう。懷徳堂は大阪にあった漢学塾で、享保九年三宅石庵を中心として門人たちが建て、十一年大阪学問所として幕府から公許になった。秋成も石庵に言及しているが、石庵は儒家ながら和学の心得もあったらしく、和歌や俳句の作も残っている。石庵も和学の心得があてた。石庵の後は門弟の中井髭庵がつぎ、さらに石庵の子春楼がついた。<sup>註三</sup>蘭洲は懷徳堂の創設にあたり石庵の助教となったが、享保十二年三十一歳の時江戸に赴き、三輪執斎に頼ったと

いう。のち津輕藩主（信寿）に知られ、招かれて弘前にくだった。元文五年辭して難波に赴き、再び懷徳堂の助教として迎えられた。当時中井翫庵が教授で、翫庵は竹山・履軒の二子を蘭洲に師事せしめた。蘭洲は持軒守任の子で、程朱の儒学を宗とし、古文辞学には手厳しい批判を加えている。真淵の古文辞学批判に先行しているが、蘭洲のは朱子学の立場に立脚したものである。（先王の道に関し自然主義に傾き、人為を斥けた点は共通性をもつ。）たゞし持軒の家訓により程朱の学に拘泥するのでもなかった。

神道や仏教にも造詣が深く、和学に通じて、「万葉集詠」・「源語詠」・「源語提要」・「古今通」・「勢語通」・「刪正日本書紀」・「説史訪」等を著し、和歌もよんだ。五井家はもと大和の出で、持軒は長く京都にいたことがあるらしく、蘭洲の随筆「茗話」に、

やまとの訓山外なるは、予が家伝来の説也。他家の説にいはぬ事也。先考かつて貝原篤信と下河辺長流とにかたられし。篤信は釈名をつくりて己が説とし、長流は僧契沖にかたり、契沖代匠記をつくりて己が説とせり。

とあるのを見ると、相当家学について自負するところがあつたらしい。持軒は通説では長流の門下だったというが、門下というよりは交友関係と見るべきであろう。（契沖の「一題一首和歌」に五井守任の歌もあり、契沖とも交友関係があつたことがわかる。）蘭洲の古学には契沖の影響が目立つが、批判的にもなっている。蘭洲は宝暦十二年六十六歳で世を去っているが、秋成時に二十九歳であつた。秋成が蘭洲に学んだとすれば、元文の末に蘭洲が大阪に来てからであろうが、元文五年には秋成七歳で、ちょうど寺小屋時代である。以後蘭洲の晩年は秋成の修学期にあたる。懷徳堂は漢学塾で、四書五経の教授を主としたというが、秋成の言葉からもわかるように、相当にくだけたところがあり、実際は和学をも教えたのであろう。秋成は竹山や履軒をしきりにこきおろし、懷徳堂に学んで放蕩に身をもちくずして若死したものとあるとか、長生したら獄門の刑に処せられそうなのがあつたとか言っているが、女色の方面

を中心とした言葉らしい。秋成の俳諧は二十歳ごろからはじまり、和歌はそれよりもずっとおくれ、自分では四十に近くなつてから身を入れはじめたように言っているが、悪童時代から懷徳堂に出入するうちに、俳諧や和歌の手ほどきはもとより、古典についても学ぶところがあり、契沖などの著書もおのずから目にふれることがなかったとはいえない。たゞありふれた雑学としての知識であるから、後年の回想では、問題にできなかったものであろう。とくに契沖については蘭洲あたりから啓発された点がありそうに思う。

宇万伎に接するや、たちまち高弟のような扱いをうけ、古典の知識を「雨月物語」等に活用しえたのも、そうした素養があったからこそであらう。秋成は歌人加藤景範にも学んだというが、景範も懷徳堂と交渉があった。秋成はまた若いころ富士谷成章と俳諧で交渉があったとも言っているが、（「胆大小心録」）、二十歳より前のことか、後のことがわからない。成章の方が四歳後輩である。秋成は若いころ淨るりや草双紙類も読みふけたという。「雨月物語」等に謡曲の影響が強く見えるのも注意されている。

秋成は「胆大小心録」で綾足につき、「とんと漢字の読めぬわろで」、と酷評を加えているが、秋成自身の漢字はどうだったのであらうか。懷徳堂あたりで、ある程度の素養を積んだかと思われるが、秋成の交友であった太田南畝の隨筆に、読本の「英草紙」や「繁夜話」の作者近路行者こと都賀庭鐘は、秋成の句読の師だったとある。「雨月物語」には「英草紙」や「繁夜話」の影響が著しく、作品の比較の上かも首肯されているが、庭鐘は大阪の儒医で、大江漁夫・大江山人・草館主人・幸夷館・千里浪子など多くの変名雅号を用いた。唐音に通じ、中国小説の翻案もあり、読本に先鞭をつけた。書画にも明るく、才人だったと見える。中村幸彦氏によると、秋成はまた若いころ、宇野明霞門の儒医勝部青魚とも親交があったという。明霞も唐音に通じ、門下から岡島冠山など唐音学者をだした。漢詩で真洌の門下として国学にも通じた竜草廬（公美）も明霞に学んでいる。秋成と庭鐘との関係は何歳ごろから明らかで

ないが、(中村氏は秋成が庭鐘に入門したのは「雨月物語」を推敲してゐたところかとしている、)庭鐘からはち医学をも学んでいる。綾足は武家育ちで、漢学の素養は相当にあつた筈であり、仏門にも入っている。後年「旧本伊勢物語」を校刊もしていて、さほど漢学の力が貧弱だったとは思えない。白話小説の類についてたゞしたりして、失望したのかも知れないが、綾足も平賀中南あたりと交りがあり、唐音にもある程度通じていたらしい。画技も華人に直接学んでいるし、長崎遊学時代の紀行に、

清人多ふくきたりてあれど、みだりに出ることをさず。花の時のミゆるされて、そこの寺院に遊ぶ。われもゆきとともに唐土人に立交りたる、おかしき興なるべし。

酔ことに通詞はいらず花の友(「紀行三千里」)。

などあつて、華人との交遊を通じて学ぶところも多かったと思われる。著書にも唐音の知識をおりこんだところがある。たゞ漢学の知識はあつたにしても、我流偏癖が多かつたようであるから、秋成あたりの勝手な質問にあつて、縦横に答え得るような用意はなかつたかも知れない。宇万伎は和漢双方に通じ、漢詩の作も残しているし、音韻などにも詳しくかつたらしいから、綾足は宇万伎を推したのであろう。

註一 為村は為久の子で、宇万伎が仕えた戸田淡路守(氏房)は為久の門下という。(為久は享保十九年十一月武家伝奏に任じ、寛保元年八月末まで勤めている。)綾足も明和四年上京に先立ち、冷泉大納言に入門し、片歌について免計を得ている。綾足、宇万伎、秋成、いずれも冷泉家とさまじい意味で交渉をもっているのは、奇である。

註二 「秋の雲」に、「我三十ばかり昔都人小島重家と云ふ人にあひて、あざ梨の古物語をきく侍りしかば、此集(「毎月集」)をも一わたりよみしかど、わかうしづ心もなくて、おぼしとめざりけり。彼の小島のぬしは小沢の翁とちかうすみて交浅からざりしを聞きしりたるものから、云々、」とあるが、「あざ梨」は契沖をさす。「秋の雲」は七十四歳の時に成つたもので、丸山氏は三十は四十の誤りかとしている。三十年前ではおかしいのであるが、「三十ばかり昔」を「三十く

「らいの昔」の意味で用いたと見れば、無理がなくなる。すなわち三十年代のはじめごろをさしたので、四十年前と同じ意味になる。「毎月集」は曽根好忠の家集「曾丹集」の一部をなし、秋成もこれにならって歌をよんでいる。「秋の雲」に「此集をも一わたりよみしかど」、とあるのは、契沖麟刻の「曾根丹後家集」があるのをさしたのであろう。

註三 蘭洲は享保十七年三月三十人扶持、御手廻格で江戸の津輕藩邸に召出されているが、信寿は前年隠退し。孫信著がついでいた。元文元年六月弘前に赴き、同四年正月十一日御近習御小姓格に進んだが、翌五年五月十一日病気で御暇となっている。(以上弘前大学芳賀与七郎教授の御調査による)。儒書の講釈が主だったらしいが、信寿の子豊次郎著教の訓育にも当たっている。致仕の事情については、男色問題があったようにも伝えられ、待遇に不満があったためともいう。元文五年致任とすると、綾足が問題を起して、郷里を出奔した後まで弘前にいたので、綾足と交渉がありそうに思われる。「津輕藩旧記伝類」の喜多村政方(耕道軒)の条に、五井藤九郎(蘭洲)が「校尉政方智能国家輔弼にあまりあり、」と評した由記事がある。同書には、江戸藩邸で諸士会談の節、兵儒の士を論じたことがあり、時に五井藤九郎が、「貴田長太夫(親邦)は誠に王道の兵者なりと感ぜりと云ふ、」とした記事もある。まぎらわしい点もあるが、長太夫は政方に従って兵法の奥義を極め、以後代々津輕藩の師範となったとあり、蘭洲が、格式はさほど高くなかったにしても、相当に重用されたことが知られ、かつ喜多村家と交渉があったろうことも想像される。

蘭洲は宝暦十二年六十六歳で世を去っているが、郷里を出た綾足がのち蘭洲と交渉をもったか否かは明らかでない。なお蘭洲の古文辞学批判については、「芸林」第一巻第五号三木正太郎氏の「浪速の儒者五井蘭洲」に詳しい。

## 七、「時雨日記」と「詞草小苑」

綾足は明和七年の初冬、(十月十七日出発)、養子房(総)丸を伴い江戸にくだった。当時は京都に定住のつもりになっていた、妻伎都は後に残した。その時の紀行を「時雨日記」(「志具礼乃記」)という。綾足父子及び綾足の知友門下の長歌、短歌、片歌(六句体・発句体)、が見え、妻伎都のよんだ長歌などもまじっている。「時雨日記」によって、鳴海や赤坂など、尾張三河方面にも片歌の門人がいたことがわかる。鳴海では平湯鞍、橋実丸、与之磨

亮雄等、有松の久田木足、赤坂の太田之路伎、等の名も見える。

此人々は、ひさしく世にあるたはやぎぶりの片歌をのみ似なき物にたのしみて、ほこりかにおもひさかえたりしが、旧宜集とふかた歌の書をよみたらひてよりかくまでに心をふりおこし、云々。

とあるが、「旧宜集」は明和四年正月に刊行した「片歌旧宜集」である。

平湯鞍は芭蕉門下の俳人として知られた下里（のち下郷）知足の裔で、六世の当主学海である。名を寛といったので、湯鞍は寛にちなんだ雅名である。屋号を苺苔園と称した。大雅堂に画を学び、また儒家市川鶴鳴註二の指導を受けて詩文書画に遊んだ。和歌俳句をも好んで、紀行数種がある。明和七年には二十九歳であった。鶴鳴は市川匡麿の名で本居宣長の「直毘盞」に批判を加えた「万我能比礼」の著者であり、「中庸精義」や老荘関係の著もあり、「鶴鳴舎文集」がある。鳴海の医家梶川氏の女を妻とし、湯鞍とも親交があった。橘実丸は医師梶川氏というから、鶴鳴の妻の実家であろう。実丸は石田博士によると、「張城人物志」に梶川樹徳として出ている人物であろうという。綾足は滞在中病気になり、実丸の治療を受けている。木足は有松綾りの家の人、之路伎は赤坂の画家で、山蔭とも号した綾足は之路伎を友人といっているが、片歌をよみかわしたりしているから、師弟関係もあつたのであろう。亮雄は学海の兄で、四世の下郷亀世の三男である。亀世も素堂及び其角の門下で、画を嗜んだ。

明和八年三月日本武尊建碑紀念として出した歌集「卯雲集」には、尾張国人として、湯鞍・木足・須計袁（亮雄）実麿（実丸）のほか、藤原与雄、平太末伎、等の名が見える。綾足は鳴海には十月廿日から二十八日までとどまり、湯鞍の家で古歌を講じたり歌会を催したりしたらしいが、安永二年三月、綾足の世を去る前年に出た「詞草小苑」はこうしたことが機縁となつてできたものらしい。一般に綾足の著とされているが、実丸が奨めて、湯鞍が中心となつて事を進め、苺苔園の蔵版として上木したものである。明和九年（安永元年）の序がある。たゞし綾足説の聞書をも



とにしたもので、実質的には綾足の著といっても差支えない。下河辺長流の「枕詞燭明抄」の後をつぎ、同書にもれた枕詞の類を補い、五十音順に排列して、用法や説明を加えたものである。枕詞と呼ばず発語と言ひ、重語・縁語・序語の類まで含んで、「燭明抄」が五言を主としたのたいして、三言・四言・六言・十二言といった語句にも範圍が及んでいる。真洵の「冠辞考」や「万葉考」の所説にたいし批判的になっているが、批判は綾足の説に拠るものである。綾足が当時真洵にたいして批判的になっていたことが知られる。「詞草小苑」は綾足の説を中心に門下がまとめたものであるが、綾足自身の著としてはより規模の大きな「詞草大苑」を予告している。

綾足は十月廿日から二十八日まで鳴海にとどまつたが、滞在中風邪にかゝり、医師である実丸の治療をうけた。

鳴海を発つて、藤川の宿で一泊し、ついで赤坂の太田之路伎（梅屋新作）を訪れた。之路伎は前記のように山蔭と号した画家で、地方では名の聞えた人物であり、片歌をも残している。「望雲集」にも作が見え、綾足の一党であった。最後は江戸の亀屋という商家に着いたとあるが、亀屋については、「こゝはきぬわたをあきなひて、おのれが友がらなる知末太といふぬしの家也、」と見える。「あきなぎ七つ」としかのえとら神無月中の七日都をたて、おなじとし霜月始の七日までしるしおハぬ」とあり、十月十七日に都を後にしてから、十一月七日まで、二十日ばかりの旅路であった。母は江戸に住んでいて、日記のはじめにも、

はゝそばの母ます国に往はしよしも

しかすがに妹をし置て往は悲しも

と詠んでいる。末尾の歌には、

今はしも都にすめばあづま路の我古郷に旅寝するかも

とあり、一時の旅路として江戸にくだったのである。「加藤枝直日記」によると、翌八年の正月には帰京の途につい

たかと思われる。「時雨日記」には記載がないが、「加藤枝直日記」でみると、江戸滞在中枝直を訪れ、伊勢能褒野に建てた倭武尊の歌碑に捧げる歌を求めたりしている。すなわち「望雲集」の歌で、明和八年正月十一日の条に、「建凌俗より哥四首見せ、外京都弟子の歌九十五首一卷圈点頼越、歌も乞て、廿一に京へ立候由、」とあるのも、「望雲集」の作をさすか。

竜草廬については前にも触れたが、賀茂真洌の門人で、名を公美といひ、「竜のきみえ賀茂のまふち問ひ答へ」の著者である。「県居門人録」に「彦根家中 竜元次郎」とあり、宝暦六年から八年のころにかけての入門らしい。伏見の人で、字は君玉、草廬のほか、竹隠・松菊・呉竹翁・明々窓・緑羅洞・等の号があり、三十歳ころ彦根藩の文学となる。多くの詩文集を残し、書にも秀でたという。「名人忌辰録」によると、寛政四年七十九歳没。真洌よりも十七歳後輩である。漢字は宇野明霞の門人で、折衷学派に属したが、明霞は唐音に通じ、岡島冠山も門下であった。草廬の父は契沖の門人だった由で、儒家ながら和学をも好み、真洌に入門したりしたと見える。草廬は三河の鳳来寺の僧等とも交渉があり、三河吉田註三(豊橋)の木村清蔭も門下の一人である。清蔭は才子で、和漢の学を修め、漢詩のほか和歌、俳句、片歌などをも残した。遺稿は紅林中行・植田古帆共編の「寓木集」に収められている。詩は大江玄圃輯「玉振集」にも数首見える。安永五年三十三歳で夭折し、一般には知られずに終った。清蔭の歌には万葉調の影響が見え、短歌片歌とも万葉仮名で書いていて、綾足にも学んだことがあるらしい。真洌にも私淑したかと思うが、直接の関係はわからない。(植田古帆は真洌の生家と縁戚関係になっている。名を義方という。)

三河方面の綾足の門人としては、「三河名所考」の著者林正樹もある。吉田の人で、好学であったが、安永八年五月十八日夭折した。「三河名所考」で綾足を「吾大人」と呼び、「詞草小苑」に見える萩と榛に関する綾足の説を引いている。真洌を「加茂大人」と呼んでおり、私淑したらしい。吉田住の郷土史家林自見正森の近親(子か)らしく

、「三河名所考」には安永四年植田古帆の序があり、つゞいて安永八年五月自見の識語が見える。自見も「三河補松」其の他の著を残した。正樹は清蔭とほゞ時代を同じくし、ともに真洌に私淑し、綾足の同門だったと思われる。綾足は尾三方面にも意外に影響を与えているのである。

竜公美は「鼎居門人録」には竜元次郎とあるが、「加藤枝直日記」に、竜彦二郎とある人物らしい。明和三年海竜（のち海量）が彦根藩竜彦二郎の紹介で枝直を訪れているが、前後して綾足も枝直の邸に出入している。「いをつどひ」（「五百集」）の序によると、海量は歌を枝直や真洌に学び、さらに綾足に学んだとあり、とくに綾足から学んだ点が多いようである。林諸鳥もふつう真洌の門人として知られているが、綾足とも親交があった。綾足よりずっと後輩で、門人同様の関係になっていたらしい。綾足が旅行にでかけるとき、妻を預けたりしている。本名を塩瀬和助といふ（利助ともある）、「慶長以来諸家著述目録」によると、「姓狛、鈴屋門、」とある。荷田在満の妹蒼生子とも交際があった。長歌に秀で、「記紀歌集」の著で有名になっているが、「紀氏六帖抄」「古人五百首」「三代八百首」等の編著もあったという。狛諸成の子ともいわれているが、誤伝らしい。前記のように「勢語諸註参解」にも諸鳥の説の書入れがある、海量も諸鳥も直接綾足に関係の深い人物として、別に考察する必要がある。

なお柳田国男氏の「菅江真澄」によると、能代本「木曾路名所図会」の書入れに、「真澄考」として、「三河国吉田駅なる植田義方は、もと賀茂真洌にまなび、俗名はうゑ田屋七三郎とて、おのれは一たびまなびの親とせし人也。いとゞ命長く、此秋里籬嶋が作きし東海道名所図会にも、義方の名毎々見えたり、」とある由である。真澄は菅江真澄で、これによると、義方が真洌に直接んだことが知られる（追記）。

註一 「時雨日記」は農橋市立図書館に羽田文庫旧蔵本が伝わっているが、石田元季博士の「俳文学考説」には「志具礼乃記」として紹介されている。博士は戻丸を実子と見ているようであるが、実子はすでに失つていて、房丸は門下を養子としたので、のち建思明と称した。「紀行三千里」板本の序文によると、安永八年の冬江戸でなくなっている。宝暦十三年の「片歌道のはじめ」の旅にも門下として同行した。

註二 市川鶴鳴の祖父は上州高崎侯に仕え、鶴鳴も晩年高崎藩から招かれている。綾足も高崎とは縁が深かった。綾足の母衛子も高崎の女流俳人一紅の句集に序文を書いたりしている。

註三 清蔭については、東三文化研究会刊「木村清蔭」に詳しい。

附記一。綾足が奥平氏と交渉をもちだしたのは宝暦二年からと言われている。前田利治氏は、「綾足は魚彦より先即ち宝暦二年より昌鹿の父昌敦と交渉を持っていた。綾足の母のもだがたきすめで絵を以て仕え、二回に渉る長崎への絵画修行は、すべて昌敦の命によるものであった。」としているが、(「国文学研究」第二十一集)、おそらく本多夏彦氏の所説にしたがったのであろう。厳密にいうと、宝暦二年の冬のことにかけて話がきまり、実際に召し出されたのは、翌三年の六月三日のことである。召し出された記事につけて、「かの野坡がとりてしだるる柳といひし身の上に成りていとおかし、此のち風流しバシ絶たるににたり」(「紀行三千里」稿本)、とある。「野坡吟草」に、「五人扶持取ってしだる、柳かな、」とあるのによつたものらしく、若干の扶持をもらう程度の奉公だったのであろうが、風流三昧で仕えたというのでもなさそうである。綾足がこのころ風流とか雅事とかいっているのは、俳諧を中心とした意味のようであるが、宝暦四年再び長崎へ絵画修行の旅に出かけた時には、「とし」とせ余りしてはからずも西の海に旅寝すべき事のいできぬ、五月の末又公門に冠りを掛けて、云々、」といっている、官を辞しているのに、絵のことで仕えたのではなく、長崎行きも一般に伝えられるように奥平氏の命によるものかどうか疑問である。「いかめしく旅立事のありて、」とあるから全く私的な旅行でもないらしいが、帰府後「卯月又公にかへしめされて出ぬ、」とあるから、いったん官を辞し旅立ったのである。「(めしかへされて)」とあるのは、仕官中の身で呼び出されたのではなく、再び召された意であろう。(宝暦六年の二月はじめ長崎を去り、江戸に帰つたらしい。帰ってきた時は浅草並木町の冠子にたよつたとあるから、公の関係は切れていたのである。四月になってまた召されたが、五月からは病気がちになり、綾足も官を辞そうとしたが許されず、住家をたまわって気まゝに療養することになった。宝暦七年二月十五日、「紫苑なるめを得てかたはらに遺ふ、」とあるが、紫苑はのちの伎都子でこのころは俳句をよんでいる。もと遊女というが、この時同棲生活に入つたと見える。「続近世畸人伝」

等に、「画のことは、はじめ何流を学びしや知らず、江戸にありし日、或高貴長崎に至りて熊斐に学び、昇進すべしとの御命ありて金三百両を賜ふに」、なじみの吉原の遊女を落籍して家を守らせたと、女が門人と通じたので、資金を与えて門人に嫁がせたと、江戸に帰ってから侯の前に塊状のものを獻書して山の芋だとかえ、立腹を買った、とかいった逸話が伝えられているのは、両度の長崎行きの前後のことであろうが、真偽のほどはわからない。二度目の長崎行きについては、官は辞したものの、遊学の資金など与えられていたのかも知れない。しかし帰府ののち官を辞したのでなく、官を辞して長崎に赴き、江戸に帰ってからまた召し出され、しばらく仕えたのであるが、病気がちのためうやむやになったと考えられる。佐々木博士の「賀茂真淵と本居宣長」によると、奥平侯は藩の医官で歌人でもあった宮沢通魏を通じて賀茂真淵に和歌の添削を乞うたという。「加藤枝直日記」によると、明和三年十二月八日に、「綾足通魏入来」とあり、翌四年正月三日には、「魚彦来」「凌岱来」、と見えるから、綾足・通魏・魚彦は枝直を通してものごころ相談だったものなるべく、真淵と奥平侯との交渉もこのことであろうか。奥平昌敦は宝暦八年に世を去り、昌鹿が後を嗣いで、このころは昌鹿が当主であった。(昌鹿は安永九年七月二十四日江戸でなくなり、真淵の墓のある品川の東だの海寺に葬られている。)綾足も代がかわってから奥平侯とは親しくしているが、当時は仕は退いて画で身を立てゝいた。のち魚彦が奥平侯に仕え、月俸を与えられたりしている。真淵と綾足双方の関係からであろうが、綾足と魚彦の関係は備後年になると淡々しくなっているようである。綾足は安永になってから、字万伎や魚彦らが校正を加えていた「宇比麻奈をこきおろしており、魚彦の「古言梯」、をも難じたという。

魚彦は昌鹿の次代昌男にも仕え、魚彦の後妻稚木も奥平昌鹿の母好子に歌の相手として招かれた。(「国学者研究」所収木村捨三「楳取魚彦」)。好子は荷田在満の門人村上影面(真淵の門人にもなっている)に添削を乞うたとあるが、稚木を招いたのは魚彦と奥平氏との関係からか否か明らかでない。魚彦の家系は豊前から出ているので、魚彦夫妻がとくに、奥平氏から眷顧を受けたについては、そうした方面からも考える必要がある。綾足がとくに奥平氏の庇護を受けるに至った事情についても、何かありそうである。「寛政重修諸家譜」によると、昌敦の室は牧野備後守貞通の女とあるが、貞通の子は越前長岡の牧野駿河守の養子になり、忠敬と称している。(牧野氏も奥平氏のもと三河の豪族として、特殊なゆかりがあった。)忠敬は寛延元年夭折し、貞通の八男忠利が嗣いだ。忠利は宝暦五年二十四歳で世を去り、さらに弟忠寛が嗣いだ、明和三年早世し、子忠精が嗣いでいる。忠敬の夫人路子は明仏院と称し、真淵の門下もなっており、忠利はじめ牧野駿河守の一統で県門に加わったもの多い。とくに明仙院は県居門の閨秀歌人として名があった。真淵と奥平氏との

関係は牧野氏とのゆかりからのようでもあり、綾足や魚彦と奥平氏との関係についても、複雑な事情が考えられる。

附記二。綾足の古典学関係書としては、『伊勢物語関係で、『伊勢物語考異』『旧本伊勢物語』のほか、大津博士の「伊勢物語古註釈の研究」に、『伊勢物語古意追考』が紹介されているが、直淵の「伊勢物語古意」から四十九条を摘出して自案を加えたものという。枕詞の解説書「詞草小苑」は平湯鞍ら門下が出したのであるが、綾足の説によったもので、綾足も相当地慎重を期した跡が見え、（「寛葉斎道ゆきぶり、」）綾足自身としては「詞草大苑」の上木を予告しているが、実現したかどうか確かでない。やはり真淵の説に批判を加えているらしい。万葉集に関し「万葉綾足草」が紹介されているが万葉集の巻一・二をはじめ、巻七から巻十までの歌句を抄出して註解を加えたものという。「万葉以佐詞考」は「伊言考」のみ所在が知られているが、接頭語に関し語義を説いたものである。他に「歌文要語」「はしがきぶり」等の著もあるが、啓蒙的なものである。晩年とくに古典研究に熱意を示しているが、円熟を見ずに世を去った。

なお、『寒葉斎画譜』はふつう宝暦十年刊となっているが、宝暦十年に成り、同十二年上木されたものである。たゞし、五巻のうち一巻は序文集で、中に宝暦十三年稿の序もまじっているから、序文集一巻は、宝暦十三年あたりの追刊らしい。本稿を草するにあたり、綾足関係の資料について青森県立図書館や郷土史家土屋雅夫氏の御好意に預った点が多く、厚く謝意を表したい。